



「草木奇品家雅見 卷之下七丁表」は、「三崎 宇平次 浜もっこく(木斛)」と「下駒込藪下 勇蔵 なんてん(南天)」である。画は、関根雲停。

「もっこく」も「南天」も秋から冬にかけて、多くは赤い小さな実をつける。この実はそのままでは発芽しないが、鳥が食べて糞として排出することにより発芽することがある。

この「もっこく」は、花を咲かせているが品評の対象は、「葉がほそく」である。

勇蔵の「南天」については、「この家に細葉南天の親木」があって、実を発芽させたところこのような細葉が出来、岩に松の如く「妙なり」と述べている。

なお、岩松の鉢は青の染付けの瀬戸焼であり、「勇蔵工夫の松」を繁亭金太が写して焼き上げたものである。

このような松の枝を「蛸作り」と言う。(2008.2.10)

(参考文献)

- ・「「草木奇品家雅見」解説」昭和51年 監修者 岩佐亮二、執筆者 塚本洋太郎、前島康彦、笠原基知治、横井政人、広瀬嘉道、芦田潔 青青堂出版
- ・「盆栽文化史」昭和51年 岩佐亮二 八坂書房

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

<http://soumokukihinkagami.com/>